

藤村達也



論争を読むのはおもしろい。それがコップの中の嵐ではなく、社会を広く巻き込むものであればなおさらである。人々が抱いているが普遍はあえて口にはされない、そんな意識や感覚が言語化され、対立点や相違点が際立つ。反対に、「何が議論されるのか」の裏に「何が議論されないのか」を読み込めば、対立しあう人々でさえ前提として当然視している、そんな認識を浮かび上がらせることもできる。論争とは、いわば人々の意識が結晶化する時間であり空間である。

本書は、英語教育をめぐる過去の論争をたどり、現代の、そして未来の英語教育への示唆を得ることを目指している。取り上げられる論争は、小学校英語教育論争（第一章・明治期）、文法訳読と「話せる英語」の論争（第二章・明治―大正期）、英語教育存廃論争（第三章・大正昭和戦前期）、英語義務教育化論争（第四章・昭和戦後初期）、平泉渉と渡部昇一の「英語教育大論争」（第五章・昭和後期）、英語帝国主義論争（第六章・平成期）の六つである。時期は明治から平成ま

でと広く、テーマも多岐にわたっている。なぜ（社会背景、目的論、いつから（学校段階、誰に（必修か選択か）、どのように（方法論）英語を教えるべきなのか、あるいは教えるべきでないのかといった、英語教育の諸論点が次々と提示される。英語教育にかかわる主要なトピックや重要人物が登場するから、「論争から学ぶ英語教育史」として教科書的に読んでも得るところが大きい。取り上げられる主張をめぐって、著者はレフェリーとしては一方の立場にやや肩入れしすぎている

の批判的分析を通じて過去の事実を解き明かそうとする実証史学の手法に依拠している。著者によるこれまでの著作も教育政策（『日本の外国語教育政策史』ひつじ書房）や教科書（『日本人は英語をどう学んできたか』研究社）などを対象としており、教育史や英語教育学の領域における王道というべきものであった。そのなかで、これまでの英語教育史研究ではどちらかといえば周知的な扱いを受けてきた論争という対象に正面から挑む本書は、英語教育史の分野を拡大し、また評者の専門

手つきはやはり歴史家の面目躍如といったところである。本書に導かれて歴史をたどってみると、英語教育をめぐる論点が昔からほとんど変わらないことに気づかされる。早期英語教育の是非も、文法訳読と会話の対立も、その主要な論点は戦前にすでにに揃っていたのである。「歴史から学ぶ」とはあまりに聞き慣れた言い方だが、それにしてもここまで同じ議論が繰り返される分野は、英語教育以外では珍しいのかもしれない。そもそも教育という領域自体が議論を呼び込みやすい性

れ、言葉に語られてしまつた。
 加えて、実際には英語が多数派の人々にとつてそれほど必要のないものだったとしても、ひとたび制度として学校教育に組み込まれば、英語教育は自ら回り始める。そこには目的が必要になる。その内容も水準も定かではなく、ゆえに決して到達しえない「実用」や「教養」が目指されるべき目的として絶えず召喚される。あるいは、早い段階から、優秀な子どもに、正しい方法で教えれば英語ができるようになるのだと、つまり、いまの「間違つた」英語

自分の経験に基づいて持論を述べる前に、まず英語教育をめぐる言葉が辿ってきた歴史を振り返ってみる。自分が語ろうとしている言葉が、歴史的に、社会的に、いかなる位置を占めるのかを把握しておくこと。どのような論点が存在し、そこにいかなる問題が含まれているのかを知っておくこと。こうしたこ

るようにおもえる場面もあるが、実証的な分析としてはフニアな態度を通しており、また立場がはっきりしているからこそ著者の英語教育観がうかがえておもしろく読める。

著者は英語教育史研究の大家である。英語教育史は英語教育という対象に歴史学の方法・観点からアプローチする研究分野であり、主に史料

分野でもある教育社会学や歴史社会学の領域にも踏み込み、示唆を与える挑戦的な研究であるとおもわれる。他方で、社会学における言説研究では広く入手可能な資料に依拠することも多いのに対して、本書では一次資料や新資料を緻密に読み解くことで、これまで論じられてこなかった事実を掘り起こしている。その

格を持っている。誰もが教育には何かしらの意味に関わったことがあり、不満の一つや二つは抱えているものである。なかでも英語教育は、人々の感情をかき立て、饒舌にさせる主題である。英語に對して抱く、憧れ、反感、自負、劣等感といった様々な感情によって、人々はいついにありふれた語りに絡め取ら

ける。

「ミシェル・フーコーは『言説』という概念を提示し、言葉はあえて口に出そうとおもえばどのように語ることもできるはずであるのに、『なぜ誰が語っても同じような語り口になるのか』、『ある語られ方はなぜされないのか』と

とからでしか、安易な言葉に語られずに、英語教育をめぐる議論を前に進めることはできないだろう。本書は、積み重ねられてきた過去とつまづき付き合い、未来を丁寧に語るための一冊である。英語教育に関心を持つ方々に広く読まれることを期待したい。

(京都大学大学院教育学研究科助教・教育社会学)